メッセージ
Message

# 川漁師の未来

地方共同法人　日本下水道事業団　理事長
**黒田　憲司**
Kuroda Kenji

2024年の新年を迎え，謹んでお慶び申し上げます。

昨年11月1日に日本下水道事業団理事長を拝命いたしました黒田憲司と申します。日頃から当事業団へのご理解，ご協力を賜り，改めて感謝申し上げます。

## アユ漁の「技」と「文化」

私は広島県，中国山地最奥の集落の一つで生まれ，物心つく以前から目の前を流れる神野瀬川（かんのせがわ）で遊んでいました。神野瀬川は，三次（みよし）市で３つの川と合流し，江（ごう）の川となって中国山地を横切り日本海へと注ぎます。

江の川はアユ漁が盛んで，三次では江戸時代から続く鵜飼いが現在も行われており，川漁で生計を立てる漁師がいます。私の父は，生前，残り少なくなった川漁師の話を聞き，漁具を収集しながら，その漁法の背後にある「技」は，川に生きる人々の暮らしや自然に根差した文化であり，「漁撈（ぎょろう）文化」であると言っていました。

川漁には多くの「技」がありますが，アユと言えば「タタキ漁」。夜更けに竹ざおで水面をたたいてアユを追い込む江の川を代表するアユ漁法です。

日が暮れた後，船頭と船のかじ取りをする「かじこ」の２名が乗った船が５～10m前後の間隔で川岸に並びます。暗闇の中，それぞれの船が川を横断するように建網（たてあみ）を入れていきます。建網（刺し網の方が一般的かもしれません）は，長辺が川幅の長さほどもある平面状の網の上部に「ウキ」，下部に重りをつけたもので，川の流れを遮断するように張って，泳ぐ魚を絡めとるための網です。かじこは，水音を立てないよう慎重に櫂（かい）を操作しながら船を後ろ向きに進め，船頭が網を下ろしていきます。網入れが終わると川下に船を一列に

並べ，川面に明るくランプを灯し，船頭が一斉に水面をたたくと，驚いたアユが逃げまどい建網に頭を突っ込みひっかかるのです。

その後，頃合いを見計らって網上げを行います。「かじこ」が船頭に調子を合わせて操船し，船頭が網を船に上げていきます。網に「アユがなった」（鈴なりになった柿のように獲れた）ら大漁です。

季節や川の深さ，アユの育ち方によって網目の細かさ，川に入れる網の間隔を変える技術，一丈80mもある重い網を不安定な船に素早く上げていく技術，また，網入れでは波も立てずに川を横断し，網上げでは船頭の手の動きを見て絶妙に舵をとる技術など，川漁師としての「技」が冴えわたります。

また，「技」と並んで重要なのが，「モミ」と呼ばれる助け合いの文化です。「モミ」は各漁師の網にかかったアユを，個別の漁獲にかかわらず均等に分け合う仕組みで，誰でも最初は下手な新入りで，周りに助けてもらってきているのだから，ベテランになった後，それを返すのは当たり前という考え方です。その背景には，厳しい自然の中で共同体を維持し，生活を守っていくための心をひとつにする，助け合いの文化がありました。

## アユと下水道？

ダムができて平常時の水量が減った現在の江の川では，川漁だけで生計を立てられる人は激減しました。川底の石につく藻やコケを食べて育つアユは，別名香魚と呼ばれ，キュウリやスイカに似た香りがあります。しかし，水量が減れば藻は泥臭くなり，アユの味も落ちます。河川改修で瀬や淵が減ればアユの生息域も失われてしまいます。江の川のアユ漁，特に天然のアユ漁は，その将来が心配されるばかりでした。

そうした中，日本下水道事業団に着任した私は，直ぐに，山形県鶴岡市において，下水処理水に含まれる窒素やリンを活用して藻類を育て，この藻をエサにした「つるおかBISTRO鮎」を育てているという話を耳にしました。天然のアユに近い香りや風味があり，すでに食品としての安全性も確認済みとのことで，新鮮なアユの内臓でつくる塩辛「うるか」の製品化の話もあるそうです。この事業の背景には，下水道関係者の多大な努力だけでなく，川漁師の未来や新たな漁撈文化を拓いてくれるかも知れない，そんな地元漁協や関係者の思いがあるのではないかと膝を打つ思いでした。

## 新たな技術の先の暮らしと文化

様々な資源が眠る下水道は，多くの可能性を秘めています。老朽施設の再構築，都市の浸水防除，脱炭素・循環型社会の形成はもちろんですが，近年，上記のアユだけでなく，ノリの生育など豊かな川・海づくりや，肥料利用など，食や生活文化と深く結びついた分野にも光が当てられています。

下水道整備の目的は，人々の豊かで安全な暮らしを支えることにあります。下水道の持つ様々なポテンシャルを活かし，これまで以上に多様な役割を果たしていく上で欠かせないのが「新たな技術」です。今後の技術の開発・活用においては，地域ごとに異なる自然や環境の中で育まれてきた暮らし，文化にどう積極的に関わっていけるのか，そういった点も一層丁寧に説明することが大切ではないでしょうか。

当事業団も「JS技術開発・活用基本計画2022」を定め，下水道技術の発展を先導し，受託事業を通じて新技術の社会実装を推進し，社会全体の発展に貢献することとしています。30年以上にわたり産学官の「技術の橋わたし」に取り組んでこられた日本下水道新技術機構のお力もお借りしながら，技術開発の先にある人々の暮らしや文化にも目を向け，事業に取り組んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。